

実践!

5.1ch サラウンド 番組制作

第73回 ~第92回・全国高校野球選手権大会~



井上 哲

毎年、日本中に大きな感動を与える全国高校野球選手権大会、通称「夏の甲子園」の第92回大会が、例年になく猛暑の中、今年も阪神甲子園球場で開催された。今年は数年ぶりに筆者も現場を訪れる事ができたので、今回の本稿では、この中継を担当している、朝日放送（ABC）スタッフの現場の様子などをレポートしたい。

甲子園とサラウンド

この高校野球・甲子園大会はサラウンド放送の歴史を語る上でも大きなポイントを占めており、夏の選手権大会を中継するABC、春の選抜大会を中継する毎日放送（MBS）、NHK などにより様々な挑戦がされている。

1980年代のアナログ放送でのドルビーマトリクス方式によるサラウンド放送を皮切りに、アナログハイビジョン放送での3-1サラウンド、そして2003年からはABCがBS朝日にて5.1chサラウンド完

全中継を開始。この頃は、ちょうど筆者も含め、BSデジタルでのサラウンド放送実現に多くの方が奔走していた時期で、この選手権大会についても、関西ローカルやネットとのサイマルの問題、CMタイミングやダウンミックスの問題、など多くを解決しなければならず、ABCのスタッフの方々は各所との調整に大変苦労されていた。筆者もこの時BS朝日側の立場で議論に参加しており、これだけ長時間のサラウンド放送は初めてだったという事で、大きく記憶に残っている。

改修された甲子園球場

その2003年に甲子園の現場を視察して以来、今回久しぶりに現場を訪れるチャンスに恵まれた。7年ぶりに訪れた甲子園は、改修された球場全体の雰囲気も（写真2）、高校野球の中継システムも当時とは随分様変わりしており、5.1chサラウンド制作体制も多くの「進化」を遂げていた。甲子園球場は、2007年のシーズンオフより改修作業を開始、2008年オフには球場の象徴とも言える内野席上の「銀傘」の架け替えや中継設備の改修も行なわれ、在阪各社が共同で使用する常設マイクや分岐方法もリニューアルされた。

銀傘から吊るされた、球場全体の雰囲気録るベースマイクは、これまで設備マイクとしてステレオマイク（CMS-9）が常設されていたが、改修に合わせてサラウンド対応のサンケンCUW-180×2に変更され、カラスの襲撃防止のため黄色い風防が付けられている。（写真3）内野席全体を覆うようになった銀傘の両サイドからは、1塁、3塁それぞれのアルプス席を狙うマイクMKH-416も設置されている。これらのマイクやネット裏のパラボラ集音マイクなどの常設マイク、共同インタビューなどの出力は、場内の分配室で各社に分配されている。（写真4）在阪各局は、この分配アウトを使用すれば基本的なサラウンド制作が可能になっており、甲子園での春・夏の高校野球、阪神タイガース公式戦など、甲子園ではほとんどの在阪局がサラウンド放送を行なっている。

マイクプラン

今回の選手権大会では、この共同の常設マイクの他にも、独自のサラウンドベースマイク、高校野球の音の演出で重要な位置づけであるアルプススタンド（写真5）のプラスバンドや応援狙い、両サイドのベンチ上やダッグアウト裏選手通路、カメ



写真1 阪神甲子園球場正面玄関



写真2 改修された甲子園スタンドと銀傘

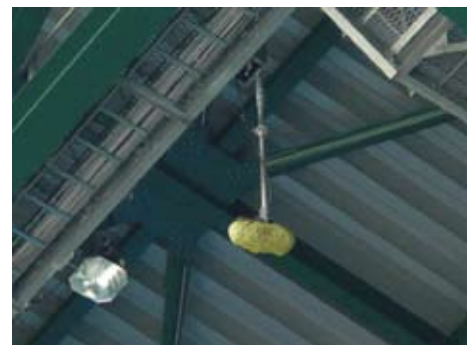


写真3 球場に常設されたサラウンドマイクCUW-180a



写真4 分配室の常設マイクヘッドアンプ



写真5 アルプススタンド



写真6 観客席に囲まれた実況席

ラマイクなど多くのマイクがABCの音声チームによりセッティングされている。

甲子園の実況席ではこれまで、かぶりの自然なスタンドマイクが使用される事が多かったが、今年からヘッドセットマイクに変更されている。

通常の試合では2人しゃべりであるが、初日、最終日などでゲストが増え、場内ノイズも非常に高くなる事を考慮して変更したようだ。(写真6)

これらの他、応援レポート、インタビュー、新設されたロイヤルシート内に事前番組用に設けられた特設スタジオ、各種VTRなどが加わる。筆者が見学した開幕初日には、これらに更に開会式のセレモニー用のマイクが加わり、トータルインプットは90近い数となっていた。

音声中継車

これら非常に多くのインプットをサウンドミックスする音声ブースは、かつては球場外のプレハブに設置され(写真7)、アナログコンソール中心に多くの機材に囲まれていたが、2008年からは音声中継車を導入。デジタルコンソールのCALREC・SIGMA中心の実にコンパクトなシステムとなっている。多くの入力48フェーダー×2レイヤーのコンソール内に納まり、ワンマンオペレートでの作業となっている。(写真8) 台数の多いVTR

のサブミックスのみ、予備コンソール兼用でヤマハDM1000に入力され、連絡担当のスタッフが管理している。1日4試合、2週間にも及ぶこの中継のミキサーは数人で交代しながら行なわれ、それぞれ個性のある音づくりとなるが、全体の音づくりの方向性については事前から議論がされ、統一感のある「ABCの音」に仕上がっている。音声中継車近辺にはこの他にも音声関係のブースがいくつか設置されている。プレハブに設置された「サウンドモニタールーム」(写真9)では、実際の放送を家庭用のAVアンプを通してサウンドモニター出来るようになっており、音声スタッフによる確認作業、関係者へのプレゼンなどに使われる。またこの大会では毎年、出場するチームの地元局のアナウンサーが自局向けに実況付けする「応援実況」も行なっており、このミックスブースも別室に設けられていた。(写真10)

朝日放送(ABC)新社屋

今回、ABCの本社も見学させて頂くことが出来た。2008年に移転した新社屋には4つのテレビスタジオと5つのラジオスタジオが設けられており、見学させて頂いたこの日は甲子園開幕前日という事もあり、今年のテーマ曲を唄う「Funky Monkey Babys」がローカルニュースのスタジオで生唄を披露していた。

翌日からの高校野球中継で甲子園から

の信号を受けるサブはGサブと呼ばれる、スタジオのないコントロールルームのみのサブである。(写真11)ここは制作技術スタッフではなく、マスター(送出)スタッフによる運用になっているようで、音声的には、ここでVTRやBGMなどの音付けが行われ、マスターから送出、放送されている。

チーフミキサーに聞く

今年のチーフミキサーを務め、全体のシステムプラン構築にあたった、技術局制作技術センターの小西剛生氏(写真12)にお話を伺った。

井上：小西さん、連日猛暑の中、中継ご苦労様です。まだ試合は続いているようですが、いろいろお話を聞きたいと思います、よろしくお願いします。まずは、小西さんの入社以来の甲子園との関わりを教えてください。

小西：入社での配属がラジオ技術でしたので、入社後一ヶ月後には甲子園でプロ野球中継の仕事をやっていました。それからラジオ技術で5年、テレビ音声で5年、それぞれでプロ野球、高校野球中継のミキサーをやってきました。

高校野球中継はラジオで2回、テレビでは今回で3回目のチーフミキサーになります。



写真7 2003年当時のプレハブ小屋でのミックス風景



写真8 ABC202 音声継車



写真9 別室に設置されたサラウンドモニタールーム

井上：甲子園の中継に関しては既にベテランの域と言えますね。苦勞する点などはありますか？

小西：システム構成などは前任の先輩方がつくりあげてこられていましたので、そんなに苦勞したことはありません。特にテレビでのチーフは音声継車更新後にやっていますので、システムもシンプルでセッティングもスムーズにできていると思います。現に音声継車更新後は、セッティング日が3日から2日に減りました。

井上：そうですね。でも長丁場の仕事ですし、ミキサーも試合毎に入れ替わりますよね、このあたりはどうですか？

小西：ABCの音声はラジオ、テレビ含めてたくさん野球中継をこなしてきている猛者ばかりです。それゆえにみんなそれぞれ野球ミキシングに関して強いこだわり、個性を持っています。その個性を生かしつつも、高校野球期間中のABCテレビとしての音はある程度統一しておかないといけないと思っていますし、その辺りは気をつけています。

井上：なるほど。確かにミキサーが代われば当然音づくりも変わってきますよね。

小西：はい。例えばアルプスの応援に関し

て言いますと、サラウンドデザインはバックネット裏で見ているイメージで音作りをしています。甲子園はバックネット裏に大きな銀傘があり、アルプスからの応援も後ろから気持ちよく反射してきますので、音作りとしてはしっかり前からアルプスの応援が聞こえて、後ろで応援の気持ちいい反射がある、というようなイメージです。

この辺のバランスがミキサーによって特徴が出やすいところで、前から芯のある応援が出すぎたり、後ろの反射に引っ張られすぎたりといったミックスバランスの違いが試合ごとに出過ぎないように気をつけています。

井上：クオリティコントロールを現場できっちりしているという事ですね。

小西：そうですね。手の空いているものが時間のあるときに、「サラウンドモニタールーム」（写真9）で確認したりするなどして注意しています。ただミキサーそれぞれの個性は大事にしたいと思っていますので、そのバランスをとるのが一番苦勞するところです。

井上：そうですね。サラウンドで制作することで難しい点などはありますか？

小西：個人的にはサラウンドゆえの難しい点ははありません。私はダウンミックスが

なければサラウンドミックスが一番簡単だと思っていますので。（笑）表現も自由だし、多少のバランスなど気にしなくても雰囲気を出すことが容易です。だからもっとも思い切ったミキシングをしたいところですが、ダウンミックスは切り離せないのです。

井上：それは放送の宿命ですよね。確かにスポーツでも音楽でも、サラウンドはそれだけでステレオの数倍の表現力や分離度があるんで、ダウンミックスが無ければサラウンドの方が簡単、というのは同感です。それに、甲子園という場所は本当にサラウンド向きですよね。

小西：サラウンドは、視聴者にまるでその場にいるように”オーツ”と思わせることができる大きな武器の一つだと思っています。そして甲子園の特徴はやはりあの大きな銀傘です。高校野球でいえば、金属バットの音、アルプスのブラス応援、歓声。プロ野球でいえば阪神ファンの津波のように迫ってくる歓声があんな大きな銀傘に反射して、他の球場では絶対に表現できない音があります。この音を少しでもいろんな人に体感してもらって、甲子園球場に行った気持ちになってもらえればと思います。それをきっかけに球場に足を運んでもらえれば最高ですね！！



写真 10 ローカル局への「応援実況」ミックスブース



写真 11 ABC 局内で高校野球を受ける G サブ



写真 12 ABC 技術局 小西剛生氏

井上：大阪の人は、皆本当に甲子園球場を愛していますよね。

小西：そうですね。これまでいろんな球場で仕事をやらせていただきましたが、間違いなく日本一の球場だと思っています。なので、そこで録る野球中継の音は日本一の音にならないといけなと思っています。できているかどうかはわかりませんが。

井上：そういう気持ちは確実に音に表れていると思いますよ。それと、プロ野球とは違う、高校野球ならではの音づくりもありますよね。

小西：はい、同じ甲子園でもいつもやっているプロ野球と高校野球では少しミキシングも変わってきます。選手の生の音が録りやすいですし、現に熱い音がしています。

井上：同感です。私も長年、高校野球の地方予選をやっているのですが、プロ野球とは明らかに変わりますよね。その熱い試合とチームのドラマをミキサーがどう表現するのか。

小西：そうですね。ベンチからの選手のあきらめない声、アルプスでベンチに入らなかった選手の応援、勝利して喜びなが

ら歌う校歌、涙を流しながら砂を拾って帰る選手の嗚咽。その音をできるだけ拾って中継を見ている人が、高校野球のドラマを感じてもらえたら最高ですね。

井上：いいですね。僕も試合終盤になると、時には試合より負けチームのベンチや応援席の音をメインで上げる事もあるし、映像や実況と一緒にあって視聴者をドラマに引き込んでこそ、高校野球中継だと思います。

さて、今年の高校野球も中盤を過ぎましたが、ここまでの感想などはありますか？

小西：当たり前ですが、大きなトラブルもなく順調に放送をしていることが一番うれしいです。恥ずかしながらチーフをやり始めてからしみじみ思うようになりました（笑）音作りはみんなの個性を出しながらうまくいっている！？と思っています。放送席に座っているときは上を見ながら、来年はどこにどんなマイクを立てようかな、とずっと銀傘にとらめっしています。

井上：ほんとに甲子園愛ですね。（笑）決勝までまだまだドラマは続きますし、猛暑もあり大変だと思いますが、是非頑張ってください。今日はお忙しいところ本当にありがとうございました！

まとめ

7年ぶりに訪れた甲子園は、あの象徴的な蔦に覆われた正面玄関、歴史を感じるケーブルまみれの端子盤室などが随分すっきりしてしまい（？）、個人的には若干の寂しさも覚えたのだが、番組制作環境としてはかなりの進化を遂げていた。これはABCはじめ在阪各社の技術スタッフの努力・交渉の成果であろう。

筆者が数日前まで地方予選の中継を担当した長野県代表・松本工業高校が登場した開幕試合で幕を開けた今年の夏の甲子園は、沖縄県代表・興南高校の史上6校目の春夏連覇という偉業で幕を閉じた。

既に来年に向けて練習を始めている高校球児達と同様に、中継スタッフの皆さんも、来年、より素晴らしい放送にするための準備がまた、始まるのであろう。

次号では、テレビ朝日が制作し、8月21・22日にTOHOシネマズ六本木ヒルズにて劇場公開された3Dライブ映画『湘南乃風 3D LIVE 軍団伝説2010』のサウンド制作についてレポートしたい。

Satoshi Inoue
(株) テイクシステムズ